

必要度の精度向上に向けた取り組みと成果

白洲 美樹

静岡赤十字病院 2-6病棟

要旨：当病棟は複数の科が混在する混合病棟で、院内でもトップのベッド回転率であり、手術件数が多く平均在院日数も短いことから、入院～手術～離床～退院と、短期間に患者の状態・ケア度が大きく変わることが特徴である。

日常業務の中で看護必要度の査定・入力は各部屋持ち看護師に任されており、翌日が確認作業を行っていたが、必要度の判断ミスや取り漏れがあることに気づいた。原因として1) 必要度の理解が個人によって違うこと、2) 全体研修はあったものの、知識不足で判断に迷う事があるが、日々の業務におわれ、詳細までクリアにできないこと、3) 手術後安静～離床まで短期間に必要度が大きく変化し、適宜入力を変更しなければいけないこと があると考えられ、統一した査定が行われるよう、個々の必要度の知識の向上が必要と感じ、病棟プロジェクトチームで必要度テストを検討・実施し、必要度テストの正解率の上昇がみられ、必要度査定の精度向上につながったので報告する。

Key words：

I. はじめに

2-6病棟は心外・血管外科・呼吸器外科・婦人科・泌尿器科と複数の科が混在する混合病棟で、年間平均病床占床率は87%であるが、月平均新入院患者数は120人/月であり、院内でもトップのベッド回転率である。また、手術件数が多く平均在院日数も短いことから、入院～手術～離床～退院と、短期間に患者の状態・ケア度が大きく変わることが特徴である。

当病棟では看護必要度の査定・入力は各部屋持ち看護師に任されており、翌日師長が確認を行っていたが、日々の必要度の入力の確認をしていくと、必要度の判断ミスや取り漏れがあることに気づいた。

原因として1) 必要度の理解が人によって違うこと、2) 全体研修はあったものの、知識不足で判断に迷う事があるが、日々の業務におわれ、詳細までクリアにできないこと、3) 手術後安静～離床まで短期間に必要度が大きく変化し、適宜入力を変更しなければいけないこと、があると考え

られ、統一した査定が行われるよう、個々の必要度の知識の向上が必要と感じた。

そこで、病棟のプロジェクトチームで検討し、必要度テストを検討・実施し、必要度テストの正解率の上昇がみられ、必要度査定の精度向上につながったので報告する。

II. 目的

個々の看護必要度の知識が向上し、正確な判定基準で日々の必要度入力ができること。

III. 方法

必要度テスト（月1回記述式）（毎日1問口頭で出題）の実施

期間：2014年4月～2015年12月

作成は必要度係が実施した（必要度係の構成は13年目・6年目・5年目・2年目）。係が採点し、病棟会議で査定のポイントを解説した。

1. 1回/月記述式

初めはB項目の各項目ごとに15問ずつ状況のわ

かる例文を提示し、その例文が「可」「介」「否」のどれにあてはまるかを○つけ方式で回答する

2. 毎日1問口頭で出題式

記述式と同じ形式で問題を作成。主にA項目で2-6病棟でよくある場面を想定して出題した。毎日誰が当たるかは係が前もって選出 2人/日昼のカンファレンス時に数字の書かれたクジを引き、引いた番号の問題を口頭で答える。その際、答えの理由も述べる。

IV. 結果

2014年からのB項目各項目ごとのテストで正解率の低い問題を2016年12月に実施したところ、全体の正解率が46%から53%に上昇した。「認知症があり看護師が着替えの順序を指示したら一人で着替えることが出来た。衣類の着脱は？」との問題では、1回目のテストでは指示は、一部介助に含まれないとの理解が多く42%の正解率であったが、1年後のテストでは92%へと大きく上昇した。それ以外の問題でも正解率の上昇が見られ、個々の必要度の理解が深まり正確な査定ができるようになったと感じた。

また、スタッフからは日々の必要度テストの場が、スタッフ間で分からないことや、日々疑問に思っていることなど、些細なことでも質問でき、話し合える場になったという意見も聞かれ、昼のカンファレンス前の約5分間という限られた時間ではあるが、疑問点を解決できる場になった。

さらに、必要度テストを2~6年目のスタッフが

学習しながら作り、正解や査定のポイントを解説することで、若い年代のスタッフの知識の向上に繋がり、病棟でコアメンバーがいることでその知識を拡散しやすいという利点があると考えられる。

VI. 結論

1. 個々の必要度の査定精度がUPし、必要度の取り漏れの減少につながった。
2. 必要度テストの場が必要度の情報を共有できる場になった。
3. 必要度のテストを作るスタッフの知識の向上につながった。

VII. まとめ

今回必要度テストを実施し、個々の必要度に対する知識が深まり、正確な査定ができるようになったという成果が得られた。

しかし今年より電子カルテになったことにより、電子カルテに不慣れであること・必要度入力タイミングが増えたこと・確認作業が複雑になったことなどにより、電子カルテになっての対策が必要と感じている。また来年度より必要度がさらに改定されることにより、個々の知識も改訂する必要がある。そのため、テスト内容を改定にあわせ変更・継続し、さらなる個々の知識の向上につなげ、さらに電子カルテでの変更忘れなどの対策も併せて行っていきたい。